

## 開目抄本尊鈔報恩鈔 本尊の研究

武 田 海 正

### 一、本尊の本質論

當家の本尊論を形式論の上からみれば各種各様の本尊があるやうにみえるが、その本尊の本体論即ち本質論からみれば定んで壽量顯本無始無終の始覺即本覺の無作三身如來である。（この無作本覺三身如來を以下畧稱して本佛といふ）

本佛とは法華經本門壽量品文底秘沈の極談、文上且立塵点到百尺竿頭一步を進めたる文底無始の古佛である。この本佛は眞言大日如來の如く單なる理法身ではない。理智悲相即の佛格である。本佛はあらゆる相對の對辭を超えてゐる。しかもその法体は無色無形無名であるからわれらの認識を超えてゐる。超認識的本佛であるから何人と雖もそのまま直接に認識し體驗する事はできない。恐らくは地上に於ける永遠の神秘であらう。

しからば地上の救済は不可能ではないか。今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是我子 而今此處 多諸患難 唯我一人 能爲救護の本願をどうするか。毎自悲願の總本願をすてるのであるか。

本佛の聖境は相對的存在たる凡夫の認識を超えてゐるから、そのまゝ一致一如を求める事はできない。本佛の方から相對的な世界へ顯現をとらねばならぬ。この本佛は如何なる顯現をとるべきであるか、私共が認識し體驗し得る顯現をとらねばならぬ、この爲には無名無色より有名有色へ顯現し、非因非果より因果相へ顯現しなければなら

ぬ。

理智悲圓滿の本佛は人類救済の大本願の爲めに、世界史上には應身釋尊と現れさせ給ひ、今末法に於てはまた五字七字の南無妙法蓮華經と顯現遊ばされたのである。史上に應身釋迦佛と顯現遊ばされたみ姿は二千五百年前の人々がよく親しく見聞し、認識し體驗したところである。しかるに滅後の私共はその尊き柔軟のみ姿を肉眼に親しく拜し、禮する事はできない。わづかに信眼を以つて拜禮が許されるのみである。こゝに於て本佛は尙一層下機の衆生の爲に具體的表象をとらねばならぬ。こゝに本佛は無縁の大慈悲を以つて玄題へまで顯現遊ばされたのである。玄題ならば滅後の劣機なる私共もこれを見聞し認識する事ができる。

この南無妙法蓮華經こそは末法救護の唯一の楔機なのである。これ以外に私共が救はれる途は絶對にないのである。それはどういふわけであるか、玄題は本佛の全現態であり、本佛の全能力を表象するものである。日女抄に妙法の光明に照されて本有の尊形となると仰せられた通り、妙法本佛の光りにてらされてのみ本尊としての絶對價值が確保せられるのである。如何に十界を並べて三千の威儀堂々と雖も、もしも妙法の光明によつて照されなければ何等本尊たるの資格價值はないのである。

## 二、本尊人法論

諸御書の本尊に關する文献によると宗祖は大曼荼羅の廣式、畧式、一尊四士式、一塔兩尊四士式、一遍首題式、一尊式等を總稱して是の本尊と仰せられてゐるやうである。一尊式や一尊四士式の本尊なら誰が拜しても人本尊に定つてゐる。しかるに大曼荼羅の中尊や一遍首題の本尊になると一勿論その表現形式が法格的なる事には異論はない一その法体の法なるや、人なるやに就ては古今にわたつて人法論の論争がたえないのである。

人法本尊論には古來人法勝劣論と、人法一如論の二論者がある。人法勝劣論には法勝人劣論と人勝法劣論との二義がある。法勝人劣論は多くの場合本法迹佛相對論であつた。これは各宗の本尊が佛本尊であつたので、それを統一する爲に立てられたものである。次に佛勝法劣論は多く本佛迹法相對論であつて、諸宗の迹法を統一する爲に立てられたものである。

だからこれ等の勝劣論は何れも本佛と本法との相對勝劣を論じたものではない。所詮法華經の人法を以つて、諸經諸宗の人法を破廢開會すればその目的が達せられたのである。

今の人法論は是の如き勝劣論ではない。正しく本佛本法の關係を論ぜんとするものである。本佛本法の關係を一層簡明に把握する爲に、これを表現形式の上からと、内容實體の上からと兩方面より觀察してみよう。

まづ曼荼羅の中尊及び首題本尊をその形式の上からみれば明確に本法である。しかしこの本法の現さんとするものは理智悲相即の本佛であつて、決して本法そのものではない。即ち本法の相は本佛の体を表現しようとしてゐるのである。もしかやうにみらるゝならば、中尊の法格的七字の妙法は体の本佛を表す爲の表現様式に過ぎないのである。

次にその表現形式的文字を離れて、本佛の眞實體を讃仰してみよう。本佛とは無始以來今日及び未來永恒にわたつて、衆生救済の爲に身口意三輪の妙化を施し、働き動きつゝある生ける事佛である。その生ける事佛の證悟の内容として本法が存在するのである。それで本佛は能證の佛であり、本法は所證の理であるとも云へやう。この場合の能證所證は勝劣を意味しない。天台は法は十界十如權實の法なりといつてゐるが、これから類推すれば法とは認識の對象であるやうである。若し法が認識の對象であるならば、法は信仰の對象とはなり得ない。こゝに問題となるのは法の佛教的理解である。通佛教では法を如何に取り扱つてゐるか。歴史的に是を述べる事は今の所要ではないから、ほん

にこれだけを述べよう。

法とは如來の則るべき法則であり、その理である。成實論に

「如實の道に乗じて來つて正覺を成ず、故に如來と名く」とある如く、法は如來をして如來たらしめる如實の道である。それからこの如來の大作たる法は又一面衆生救済の繩ともなり、舟ともなるのである。こゝに於て法は能化所化共に實修實證すべき久遠の佛道であると云ふ事ができる。久遠の佛道は眞如法性の理であり、自然法爾の大道であるから、是を禮拜し、是を尊崇すべき性質のものではなからう。むしろ是の道に則り、是の道を眞面目に修行すべきものであらう。尊崇すべきものは法たる繩や舟ではあるまい。實にその繩を岸上より下す人、舟を漕ぐ楫取こそ私共の尊崇尊重の對象となるべきものではなからうか。

久遠の佛道たる本法の如實の體驗者たる本佛釋尊こそ私共の信仰の對象となる絶對價値的實在者であらねばならぬ。

しからば何故に最初から佛格的表現方法をとらぬのであるか。本尊を南無妙法蓮華經といはずに、何故南無本佛といはなかつたか、もし南無本佛本尊と書いてあれば六百年の異論の根を斷つ事ができたであらう。これ末法の大導師ともあらう大聖人の千慮の一失ではないか。

その答は簡單である。本佛は或説已他身といひ、或は然燈佛等といひ、名字不同年紀大小の一月萬影の顯現態をとられる佛格である。だから本佛そのまゝの全体に名づくべき言葉がない。當體義抄に至理名無し聖人は名づけて妙法蓮華經といふと仰せられてゐる通り、本佛には本來名等はないのである。無名無色の無縁の慈悲の働きそのものたる眞實在佛なのである。その大慈悲者たる俱体俱用の普遍的本佛の全貌をうかがふには、個性的個体的個別的相對的釋迦

牟尼佛等の名ではとうてい満足できないのである。こゝに本佛の全顯態を見奉らんとする熱烈なる信仰のほどばしりから、その本佛自ら、實修實證したる本法を書き表し、唱へ出したのが御題目である。

また如何に人本尊だと確定しても、事觀の妙法を實修し實證しない所の人本尊は一毫の價值もないのである。例へば他宗教の人本尊は本法を修證しないから、權佛迹佛と破廢するが如きものである。こゝにまた本法の本法たる價值があるのである、實に本法は本佛をして本佛たらしめる絶對價値的存在として認識されなければならぬのである。壽量品の本佛は久遠の本法を修證した唯一絶對の本尊である。

### 三、教門本尊と觀門本尊

上述の如く當家本尊の法体は本法の實修實證たる久遠の本佛である。この本尊の實體に就て近世の宗學者間に教觀二本尊論があるやうである。如何なる立場から如何なる意味に於てこの教觀二門の本尊を論すべきであるか。教觀二門といへば壽量品の文上文底の相對論に親しいやうである。もし文上文底の義に於て教觀二門の本尊を論するならばそれは台當判に過ぎない事になりはしないか。もしさうであるならば今の要でないから且くおく。今はこの意味の文上文底と云ふ範疇の下に詮顯された文底無始の本佛の上に於て教觀二門の本尊を論じやうとするものである。かやうな意味ならばむしろ、教觀本尊論といふよりも信觀本尊論といふ方が妥當であらう。

### 四、信心本尊と觀心本尊

無始久遠の本佛は私共の信仰の對象である。迷界に沈淪せる私共を久遠の大古より四六時中何を以てか救済せんと胸をこがし、袖を下して居られるのだ。その救済の實踐として久遠の大古すでに本法を實修實證し玉ひ、久遠元初に於て十界へ平等に本因佛種を下種されたのである。私共九界はこの無緣の大慈悲に感激して、主師親三德有緣の本佛

を尊崇し信仰し奉るのである。

このをり私共は自然に本佛体内へ攝取されて本佛と一如するのである。この一如した光景を本佛の妙光にてらされて本有の尊形となると云ふのである。この時には九界は消えてしまつてたと實在するものは絶対の本佛一尊となるのである。絶対尊たる本佛を信仰してゐる間は本佛の外には何ものもない状態にある。これを信心本尊といふのである。今かりに自他二力の上からこれをみればどうなるだらう。信心本尊は本佛の絶対力より外に何ものも認めないのであるから絶対他力の本尊とも云へるのである。

この信心本尊成就の時を私共の即身或佛といふのである。當家の成佛論は現實眼前に於て、本佛を信仰する事それ自体の上に認めるものである。過去の久遠なる、未來の永遠なる皆悉く現實の一瞬時に含有してゐるのだ。我家の成佛論はかやうな象徴主義の上に立つものである。かくて本尊論も成佛論も、私共が本佛を信じ、本法を唱へる所に成就し究盡するのである。

次に信心本尊は如何なる意味に於て觀心本尊となるのであるか、私共が生涯の中一度もこの本佛を信するならば、そのまゝ即身成佛の妙果を味つた事になるのだ。しからば佛となつたものはどうすればいいのか。佛の事は衆生救済であるから、佛となつたものは必然的に化他行をやらねばならぬ。本佛を信じて自行を全うした者は自利利他圓滿の妙果を期すべきである。こゝに自ら猛烈な傳道布教運動が起るのである。

一度布教戰線に立てば今までは信心本尊として自己の眼前に實在してゐた本尊は、一瞬にして自己体内の本尊と轉化し己心本尊となるのである。だからその人の説法は己心に本尊と顯れたる本佛それ自身の叫びであり、唱題であり布教傳道であるといふ事ができる。この本佛自らの宣言であつてこそ初めて力強き末法下種が可能なのである。この

意味に於てのみ信心本尊は一轉して觀心本尊の名に價する本尊となるのである。もし信心本尊を絶對他力の本尊といふならば、觀心本尊は絶對自力の本尊といはねばならぬであらう。しかもこの本尊の本体としては史上の應身釋尊に即せる本佛をとるのであるから此の点は眞宗等のとうてい企て及ばぬ本化獨歩の法門である。

## 五、開 目 鈔

開目鈔上下卷、文永九年壬申二月於佐渡塚原聖壽五十二才撰述、御眞蹟在延山今已燒失。

開目鈔は法に於ては權實判をとき、人に於ては末法の大導師たる人の開顯をせられた御書である。然しその末法の大導師は如何なる力によつて日本の柱、日本の眼目、日本の大船となり得たか。この事もし開目鈔に明かされなければ、佐渡の國より弟子共に内々申す法門あり、魂魄佐渡の國にいたりて等の自讃も空しいであらう。然らば聖祖の御一代を動かした背後の力は何んであつたか。聖祖御生涯の原動力は實に無始實在の本佛釋尊であつた。その本佛本尊に就ては、或る点では本尊鈔よりも尙明確に說かれてゐるのである。劈頭の

夫一切衆生の尊敬すべきもの三あり。所謂主帥親これなり。

(七四七)

は末法導師の三徳でもあるが、意は本尊たるべきものの資格としての三徳をあげられたものでもある。それは釋尊が三徳有縁の佛である事を

三には大覺世尊は此一切衆生の大導師、大眼目、大橋梁、大船師、大福田等なり。(七五〇)  
と述べられてゐるのに明である。この世尊は文は爾前今經を分別しない釋尊のやうであるが、意は壽量文底無始實在の本佛を說かうとしてゐるのである。

この本佛が顯れなければ一念三千義、二乗作佛等も浮草水月のやうなものである。

いまだ發迹顯本せざればまことの一念三千もあらはれず。二乗作佛も定まらず、水中の月をみるが如し。根なし草の水の上に浮るにたり。

(七六五)

それが一度本門壽量品が顯れると

本門にいたつて始成正覺を破れば四教の果を破る、四教の果を破れば四教の因やぶれぬ。

全上

と云ふやうに迹門爾前の藏通別圓の法報應等の佛は悉く破られて唯一絶對の久遠實成の本佛ばかりが現在前するのである。

爾前迹門の十界の因果を打やぶつて本門の十界の因果をとき顯す。此即ち本因本果の法門なり

全上

因は九界であり、果は佛界である、その本果たる本佛は自ら爾前迹門に説かれたる諸宗の本尊を打ち破つて、本門の無始本有の壽量所詮の本佛本尊なる事を説き顯す法門である。

九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に具りて眞の十界互具百界千如一念三千なるべし

全上

九界が無始本佛に包容攝取されるのは信心本尊の場合である。佛界が無始九界に具るといふのは觀心本尊の立場である。かやうな本佛信仰を事一念三千といふのである。即ち事一念三千とは無限創造力を有する本佛十界緣起そのまゝの活動態に名づけたものである。それは生きて活動し、働いてゐる如來秘密神通之力さながらなる本佛の眞体である。是の相を圖顯したのが大曼荼羅である。だから事一念三千とは生ける本佛の全貌を人間の言葉を以つて表現しようとした熱烈なる信仰表現なのである。是の本佛本尊はまた本尊鈔の首題を以つて顯し玉ふ無作本佛でもある。恐らく日本語を以つてしては是れ以上に本佛を説明し得たものはないであらう。



これで開目鈔の本佛本尊論に對する原理論本體論は終つた。次の連文は是の如き本質を有する本佛本尊を以つて諸宗の本尊を破廢するのである。

### B 他宗本尊破

諸宗の本尊に對しては本佛本尊が如何に絶對權を有するかをみよう。

斯うてかへりみれば華嚴經の台上十方、阿含經の小釋迦、方等、般若、金光明經、阿彌陀經、大日經等の權佛等は此の壽量品の佛の天月しばらく影を大小の器にして浮べ給ふを 諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ 遠くは壽量品をしらず。水中の月に實月の想をなし或は入つて取らんと思ひ、或は繩をつけてつなぎとめんとす。天台云不識<sub>レ</sub>天月<sub>一</sub>但觀<sub>ニ</sub>池月<sub>一</sub>等云云 (七六五)

顯本已後爾前經所説の諸宗の本尊を觀れば皆悉く水月浮草の如きものである。唯一絶對の本佛本尊ばかりが、現在前して輝いてゐる。他宗の本尊は日出の後の霜露の如く消滅し、星の如く姿を消してしまふのである。

然るに滅後未代の人々はかやうに尊い本佛本尊を知らず、我即是父の每自悲願を忘れてゐるのは如何なる理由か。日蓮案云く二乗作佛すら猶爾前づよにをばゆ。久遠實成は又にるべきもなき爾前づりなり。其の故は爾前法華相對するに、猶爾前こわき上、爾前のみならず迹門十四品一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出壽量の二品を除ては皆始成を存せり。雙林最後の大般涅槃經四十卷其外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく法身の無始無終はとけども應身報身の顯本はとかれず。いかんが廣博の爾前本迹涅槃等の諸大乘經をばすて、但涌出壽量の二品には付べき。

(七六五—七六六)

と仰せられた。他宗の者は文献の量に迷惑して、その質を見分ける事ができなかつたのである。諸經は如何に如來

の無始無終を説く文句を並べても、その意は法身の無始無終に限られてゐるのである。然るに壽量品の顯本は法報應三身具足の顯本である。諸經の抽象的な單理法身の顯本なるに對して、壽量顯本は生ける具體的な三身圓滿の本佛の顯本である。これを報應顯本とも云ふのである。

附言 本多日生師等はこの報應顯本を主張しながら事一念三千義を否定しようとする傾向あるはどうした事か。報應顯本は事一念三千義である事に氣がつかぬのであらうか。事一念三千義とは本佛が自ら報應の身を示現して十界へ顯現する様の説明式なる事を知らぬのであらうか。かやうな意味の下に初めて報應顯本で可能である事をしらぬのであらうか。

もし本法たる事一念三千義を實修實證しない本佛なら、あかの凡夫にすぎないのである。それこそ本多師の主張する本佛とは、實相抄の本多師の最もいやがる凡夫の本佛の謂か。何んとその還著於本人の難を脱れないのであらう事よ。

### C 依 文

如上の果海の十界を孕む本佛は如何なる原據によつてゐるのであるか。

然善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由佗劫等云云 此の文は華嚴經の三處の始成正覺、阿含經云初成、淨名經の始坐佛樹、大集經云始十六年、大日經の我昔坐道場等、仁王經の二十九年、無量義經の我先道場、法華經方便品云我始坐道場等を一言に大虚妄なりとやぶるもんなり。

(七九〇)

これによれば本佛本尊の正依文は然我實成佛已來無量無邊百千萬億那由劫の文である。その意は壽量文底の無始實在無作本佛の顯本である。

この本佛は天月の如く衆生救済實現の爲に十界の水にその妙相を示現し玉ふのである。その示現した佛は能緣起の本佛に對しては所緣起の佛であるから分身といはれるのである。こゝに今日最も進歩せるものであると云はれてゐる宗教的對象としての汎神教的・一神教が成立したわけである。

此の過去常顯るゝ時、諸佛皆釋尊の分身なり。爾前迹門の時は諸佛釋尊に肩を並べて各修各行の佛なり。故に諸佛を本尊とするもの釋尊等を下す。今華嚴の台上、方等、般若、大日經等の諸佛は皆釋尊の眷屬なり。 全上

と云へば本佛は十方諸佛菩薩を統帥する事佛なる事が明である。

如何なる國家でも一定の國土を有してゐるやうに、どんな宗教でも理想の國土をもつてゐないものはない。然らばこの本佛の住所は何處であるか。

佛三十成道の御時は大梵天王、第六天等の知行の娑婆世界を奪ひ取り給ひき。今爾前迹門にして十方を淨土とがうして此の土を穢土ととかれしを打ちかへして、此の土は本土なり、十方の淨土は垂迹の穢土となる。 全上

これは本尊鑽の今本時の娑婆世界と同意の文である。で此の本佛は娑婆世界を本國土とし、其の化境の中心とするのである。

#### D 倫理的宗教としての本尊

文化時代の宗教はより多く倫理的でなければならぬ。當家の本尊は三德有緣の本佛である。三德有緣の佛と云へば宗教的といふよりむしろ倫理的意義が濃厚である。

本佛が一切衆生の主君であるといふ事は

靈山八年の法華結縁の衆今まゐりの主君にをもひつかず、久住の者にへだてらるゝが如し

の文に明である。本佛が一切衆生の恩師であると云ふ事は次の連文に明である。

今久遠實成あらわれぬれば東方の藥師如來の日光月光西方阿彌陀如來の觀音勢至、乃至十方世界の諸佛の御弟子、大日金剛經等の兩部の大日如來の御弟子の諸大菩薩、猶教主釋尊の御弟子也。諸佛釋迦如來の分身たる上は諸佛の所化申すに及ばず。何況此土の劫初よりこのかたの日月星等、教主釋尊の御弟子に非ずや。

全上

この主君であり、恩師である本佛を忘れたる諸宗を破して

而るを天台宗より外の諸宗は本尊にまどへり

全上

と斷じられた。次にまた本佛本尊を親に約して諸宗の本尊を破してゐる。

俱舍成實律宗は三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり。天尊の太子が迷惑して我身は民の子と思ふが如し。華嚴宗眞言宗三論宗法相宗等の四宗は大乗の宗なり。法相三論は勝應身ににたる佛を本尊とす。天王の太子我が父は侍と思ふが如し。華嚴宗眞言宗は釋尊を下て盧舍那の大日等を本尊と定む。天子たる父を下て種姓もなき者の法王のごとなるにつけり。淨土宗は釋迦の分身の阿彌陀佛を有縁の佛と思て教主をすてたり。禪宗は下賤の者一分の徳ありて父母を下ぐるが如し。佛を下け經を下す。此皆本尊に迷へり。例せば三皇已前に父をしらす人皆禽獸に同ぜしが如し。壽量品をしらざる諸宗の者は畜同。不知恩の者なり。故妙樂云々一代教中未會顯遠、父母之壽不可不知、若不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>父壽之遠<sub>一</sub>、復迷<sub>ニ</sub>父統之邦<sub>一</sub>、徒謂<sub>ニ</sub>才能<sub>一</sub>、全非<sub>ニ</sub>人子<sub>一</sub>等云云―壽量品の佛を知らざる者、父統の邦に迷へる才能ある畜生と書けるなり。

(七九一―七九二)

これらの御文によれば本佛は宗祖及び末代の人々の主であり、師であり、親である事が極めて明瞭である。本佛をしらぬ諸宗の者は不忠不孝の惡人といふなり、畜生だと極論されてゐる。唯一本佛をかくけて大義名分を明かにする

あたり、よく我國體と冥合して將來必ずや世界の宗教となるのであらう。

上述の如く開目鈔には本尊の本質論、對諸宗本尊論、倫理的本尊論等にわたつて本佛本尊義が高潮されてゐる。

おしむらくは妙法蓮華經と本佛本尊の關係があまり明瞭でない。本因本果の法門は十界事常住、事一念三千義を説いてゐるのであるから、本尊鈔等の義によれば明に事觀の南無妙法蓮華經は本佛の所證である。開目鈔ではこれを本佛所證の妙法であるとしても、この題名によつてのみ本佛を全表するといふ明文はない。開目鈔は人開顯正意で本尊正顯の御書でないから、その本尊法体論は或る程度まで盡きてゐても、その表現論は縱容なのであらう。

本多師等の迷の原因はこゝにあるか。

## 六、本尊鈔

本尊鈔文永十年癸酉四月聖壽五十二才於佐渡一谷撰述

在御眞蹟中山法華經寺

本尊鈔には本尊法体論、本尊表象論、本尊流布年時論等委細を極めてゐる。しかし諸宗本尊破と、主師親三德に約して説く倫理的説明は開目鈔の如く詳しくない。

### A 本質論

本尊鈔に説かれた本尊も開目鈔と同じく本佛本尊である。本佛をして本尊たらしめたのは何人であるか。それは本法である。本法とは本佛所證の事一念三千觀である。

本佛本尊の本質論たる事觀の法門に就ては開目鈔より一層具体的に説かれてゐる。事一念三千觀とは如何なる内容を有するのであるか。先づ事觀に於ては左の如き深義を信解する事ができると思ふ。

1 これを靜的に考へれば本佛には自然法爾として本來十界三千が互具互融してゐるのである。

2 これを動的にみれば十界三千は悉く能縁起の本佛から縁起した所縁起の實在である。

3 これを一層宗教的にみれば子たる十界は悉く父本佛に對して隨喜渴仰し合掌禮拜してゐる實相である。

1 の義に就ては

不輕菩薩(於<sub>三</sub>所見ノ人見<sub>三</sub>佛身<sub>一</sub> 悉達太子、自<sub>三</sub>人界<sub>一</sub>成<sub>三</sub>佛身<sub>一</sub> 以<sub>三</sub>此等<sub>一</sub>現證<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>之也 (九三三)

と十界互具の現證をあげられてゐる。

2 の義に就ては

教主釋尊<sub>一</sub>五百塵点以前ノ佛也。因位<sub>ニ</sub>又如<sub>レ</sub>是<sub>一</sub>自<sub>レ</sub>其已來 分<sub>三</sub>身<sub>一</sub>十方世界<sub>一</sub> 演<sub>ニ</sub>說<sub>シテ</sub>一代聖教<sub>一</sub> 教<sub>ニ</sub>化<sub>シタマフ</sub>塵

數衆生<sub>一</sub> (九三四)

と佛界の無盡縁起の法門本佛の無限の創造力を力説されてゐる。

3 の義に就ては受持讓與段、四十五字法体段、末文の天晴地明の文等皆これを證明してゐる。

1、2 の義は原理論であるが、3 の義は現實の問題である。慈父本佛は大慈悲のみ手を垂れて、久遠以來私共を救済してゐたのである。その生々しい生ける本佛の實相を書き顯したのが大曼荼羅であり、その原理論は事一念三千論である。

## B 本尊表象論

無始久遠の本佛は自由自在に身を示現して、無上最大法輪を轉じられ、一切衆生を濟度し玉ふ。かやうな生きてゐる本佛をそのまゝ表象表現する事は人間としては永遠にできぬ業であらう。然らば永く地上の神秘として秘められなければならぬのであらうか。

本佛のやむにやまれぬ毎自悲願は如何なる妙相をとつて現れたか。

是れ全く日蓮が自作に非ず。多寶塔中の大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎたる本尊なり。

(一二六二五)

といへば本佛が自ら妙法に顯現遊ばされた妙相が本尊の相であるのである。それを本尊鈔にはかう說かれてゐる。

今本時娑婆世界、離三災出四劫常住淨土、佛既過去不滅、未來不生、所化以同體。此即已心三千具足、三種、世間也。迹門十四品未說之。於法華經內、時機未熟故歟。此本門肝心、於南無妙法蓮華經、五字、佛猶文殊藥王等不付屬之、何況其已下乎。但召地涌千界說八品付屬之。其本尊爲體、本師娑婆上、寶塔居空、塔中妙法蓮華經左右釋迦牟尼佛多寶佛、釋尊脇土上行等四菩薩、文殊彌勒等四菩薩眷屬<sup>ヲシテ</sup>居<sup>ニ</sup>末座。迹化他方大小諸菩薩萬民處大地。如見雲閣月鄉。十方諸佛處大地上。表迹佛迹土故也。——來入末法、始此佛像可令出現歟

(九三九—九四〇)

この御文によれば本佛所住の本國土妙に初り、本佛の久遠の生命を説き、本佛の表象形式論から本佛の力用に至るまで明示されてゐる。

この御文によつて初めて本佛の表象形式が明確になつた。南無妙法蓮華の五字、塔中の妙法蓮華經は何を顯してゐるか。いふまでもなく壽量文底無作三身の本佛を顯してゐるのである。御義の無作三身の寶號を南無妙法蓮華經といふ也等の文をかりてくる必要もない程はつきりしてゐる。來入末法といへば末法に本佛が出現するをりは必ず南無妙法蓮華經の名によつて全顯する事に定つてゐるのである。

この南無妙法蓮華經は本佛久遠元初に於て實修實證された本法である。事一念三千觀である。十界を救濟せんとして久遠元初に轉ぜられた根本法輪でもある。當家の宗旨を三大秘法と定める學者もあるやうだが私は全的賛成はしない。大聖人の宗旨は斷じて南無妙法蓮華經の一元論である。本尊は三法式だ。本尊は十界だ。いや法本尊だ。人本

尊だ。本尊は佐渡始顯の曼荼羅でなければならぬ等といふ後世の雜論はとらない。學者も知らず、返つて信者の心を惑亂さすのが學者の役目と考へてゐるらしい。もし日蓮聖人の本尊説がわかりにくいならそれをわかり易くするのが學者たる者のつとめではないか。

本佛はもと色もなく名もましまさぬのである、たと機縁に隨つて種々の名色を示現するのである。御在世には釋迦牟尼佛の名で十方の諸佛の名と亂する憂がなかつた。

今末法は十方諸佛各修各行の佛菩薩雜然として世に行れてゐる。この時に當つて本佛が本化を使して南無妙法蓮華經と御出現遊ばされたのは有史以來未曾有の一大事因縁であらねばならぬ。この故に當家の本尊は久遠の本法の名の下に本佛を全現してゐるのである。かくて久遠の本法再び末法に出現したのである。

#### C 本尊流布の年時

本佛本尊は唯一絶對の本佛でありながら、救濟の爲には十界へ身を示現する。この超越的にして而も內在的な本尊の顯現する時はいつであるか。

正像二千年之間、小乘釋尊迦葉阿難爲脇士、權大乘並涅槃法華經迹門等釋尊以文殊普賢等爲脇士、此等佛造三畫正像一未有壽量佛、來入末法始此佛像可令出現歟 (九四〇)

此時地涌千界、出現本門釋尊爲脇士、一闍浮提第一本尊可立此國、支震旦未有此本尊 (九四八)

今日の如く時代が進めば宗教信仰も進化して、下級な宗教は自然に清算されねばならぬ。然るに天理教、大本教、右翼、左翼等盛んに流行するのはどうしたのか。末法は濁世鬪諍堅固の時だとすまうのであるか。否私共は是の如き優秀なる高等信仰をもつてゐるのだ。この光明を以つて現世の闇を照らさねばならぬ。いよ／＼折伏の劔を掲げて立つ



べき時が來たのである。

D 依 文

本鈔は本尊の依文として然我實成佛の文と、是好良藥の文と、結要四句の文をあげてゐる。

其の第一の文に於ては已心顯現の本尊を明してゐる。

壽量品云然我實成佛已來無量無邊百千萬億那由佗劫等云云我等已心釋尊五百塵点乃至所顯三身無始古佛也。(九三九)  
本佛が自ら法華經を信する人々の心の家に御誕生顯現遊ばすといふ文である。

其第二文に於ては末法の本尊表象形式を説いてゐる。

是好良藥壽量品肝要妙体宗用教南無妙法蓮華經是也。(九四四)

本佛が末法に出現するをりは必ず南無妙法蓮華經の名のもとに全顯するといふのである。

其の第三文に於ては本尊傳弘の人を明してゐる。

此十神力以妙法蓮華經五字授<sub>二</sub>與上行安立行淨行無邊行等四大菩薩<sub>一</sub> (九四六)

以上の如く本尊鈔には本佛本尊の体を明し、その顯現を論じ、その流傳の時と人とを示されてゐるのである。

不<sub>レ</sub>識<sub>二</sub>一念三千<sub>一</sub>者佛起<sub>二</sub>大慈悲<sub>一</sub>妙法<sub>三</sub>五字袋<sub>二</sub>內裏<sub>一</sub>此珠<sub>三</sub>令<sub>レ</sub>懸<sub>二</sub>末代幼推<sub>一</sub>頸<sub>一</sub> 全上

の結文にはよくその消息を明してゐる。佛は慈悲をその体とし、その体を妙法に全顯し、その妙法によつて救はれる者は末代の人々であるからである。

七、報 恩 鈔

報恩鈔建治二年七月聖壽五十五才於身延山撰述

御眞蹟身延今已燒失

報恩鈔は開本兩鈔よりも明かに本佛本尊を宣揚してゐる。

日本乃至一闍浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし。所謂寶塔の内の釋迦多寶外の諸佛並に上行等の四菩薩脇士となるべし。

(一五〇九)

あまり御文が明白であるから、私註の必要がない。しかるに古來異論が絶えないのは不思議である。當家の本尊が本佛なる事は御書全体共通の御眞意である。今報恩鈔は卒直にかう仰せられてゐる。誰も疑をさしはさむ餘地がない。これを法本尊家が無理に法と曲解したり、また人本尊家が題目を別ものゝ如く誤解したりするのは何れも忘肝の誹を免れないであらう。

本尊鈔をみて本佛が南無妙法蓮華經と全現態をとる事は明である。それは實に久遠の掟なのである。今の報恩鈔は表象論でないから本門の教主釋尊と直に体をあげられたのである。(三秘並明等の説はとらない)

次に教主釋尊と所謂寶塔中の釋尊との同異論もあるやうであるが問題にしない方がいゝと思ふ。すなをに何れも本佛の謂であるとみたらどうか。体本用迹の釋だ。否脇士だ。と争ふことはつゝしみたい。

この報恩鈔の御文を拜した人はすなをに本佛が本尊だ。あゝ有難い事だと感激すればそれでいゝのである。その外別の才覺無益だと思ふ。

## 結 論

以上開本兩鈔及び報鈔恩の三鈔にわたつて聖人の本尊論を畧述し已つた。聖人の御書を拜すれば、本尊の事を大曼荼羅、或は南無妙法蓮華經、或は壽量品の佛、或は本門の本尊或は教主釋尊等と仰せられてゐる。その言葉はをりにふれ時によつて異つてゐる。けれどもその胸中秘奥には何時も無始實在の本佛を信仰して居られたやうである。